

隈研吾

KUMA Kengo

建築家／東京大学特別教授・名誉教授

日本建築界の第一人者で、東京二〇二〇オリンピック・パラリンピック競技大会のメイン会場となった国立競技場の設計にも携わった隈研吾さん。その原点は、一〇歳の時に感動した巨大な近代建築でした。しかし建築家への道を歩む中で、工業化社会における鉄やコンクリートを使う建築ではなく、環境と調和する穏やかな建築を目指すようになりました。どのような転機があったのでしょうか。これからの時代にふさわしい建築について語っていただきました。



偉ぶらない建築をつくる

少年時代に衝撃を受けた 東京五輪の巨大建築

——一九六四年の東京五輪の時に見た「国立代々木競技場」が建築家を目指したきっかけだと著書で書いておられます。それから半世紀以上を経た二度目の東京五輪では「国立競技場」の設計に携わられました。

隈 不思議な縁を感じますね。最初の東京五輪の頃、僕は横浜と東京の間の大倉山というところに住んでいました。自宅は木造のぼろい平屋で、遊び場は近くに広がる田んぼだったんです。ザリガニ捕りをしていた田んぼの中に、五輪開催に向けて新幹

線の高架を支える大きな橋脚（注1）が建てられ、新しい駅（新横浜駅）もできた。それはある種のショックな体験でした。まだ木造の低い建物しかなかった時代に、巨大構造物が建ち上がったいくその過程を、一番多感な頃に眺めていたのです。

——感動を与えた当時の国立代々木競技場は、丹下健三（注1）の設計でした。

隈 小学四年生、一〇歳でした。僕は丹下さんの巨大な競技場に出会う前から、当時の現代建築を見て回っていました。上野の

東京文化会館とか渋谷にあった児童会館とか、デザインや建築が好きだった父親に連れられて。でも、それらには代々木競技場の天に届くような高さが感じられませんでした。四角い箱のような建築が目立つ中で、丹下さんの競技場には曲面も使われている。その造形力に圧倒されたし、競技場の室内空間も天から光が降り注ぐように設計されていて、また圧倒されました。「こんなものを人間がつかれるんだ」と、近代化のパワーを表象する建築に驚愕（注2）したわけです。

だけど、僕が思春期を迎えるにつれて、その時の熱はすーっと冷めていったんです。六四年以降の日本は公害や環境問題が

深刻化しました。建築家の夢は消えなかったけれども、近代化や工業化というものに対しては、やばいなと思いはじめたのです。

——丹下さんに続く世代の建築家である黒川紀章（注2）にも影響を受けた時期があると同じでした。

（注1）丹下健三

一九一三〜二〇〇五年。日本建築界の巨匠。戦後日本の近代建築を世界的レベルに引き上げた。代表作に国立代々木競技場、広島平和記念資料館、新東京都庁舎など。

（注2）黒川紀章

一九三四〜二〇〇七年。メタボリズム論を提唱し、新陳代謝して生まれ変わっていく生物の原理に建築家は学べと主張した。代表作に国立新美術館など。

隈 中学生の頃、黒川さんの本が書店にずらりと並んでいました。黒川さんは、これまでの建築は西欧的・機械的原理であり、これからはアジア的・生物的原理でなければならぬと、近代のデザインを主張していて、僕は夢中になって読みました。でも、七〇年の大阪万博で黒川さんのカプセル建築（東芝工日館）を見に行ったら、まるで鉄の怪物みたいだったんです。これって超近代だ、言ってることとやっつてることが違うと思つて、黒川さんへの熱も冷めました。大学に入る頃には、黒川さんや丹下さんの建築はこれからの時代に合っていないのではなにかと感じていました。

—— 大学から大学院に進学する際、変わり者の建築家という評判の原広司さん（注3）の研究室を選択されました。

とで、自分の求めるものが見つかるかもしれないと期待したんです。未開の集落の離散性を追究して、そこで得たものを自分の建築につなげられるか、全然わからなかったけれども、丹下さんと黒川さんのやり方にはない手掛かりを直感的に感じていました。

—— 大学院修了後、ニューヨークに留学されますが、そこで日本の伝統建築の魅力に気づいたということも書いておられます。

一方で、日本の伝統建築には興味がなかったんです。料亭なんかを設計する和風建築家の作品は、古臭い過去の遺物にしか見えませんでした。丹下の近代も、単なる日本の伝統回帰も避けたかったのです。ただ、ニューヨークで日本について質問されたりすると、日本のことを自分自身で全然知らないとわかったし、先を行く建築家ほど伝統の中にも現代性を見出そうとしていることも知りました。ついに僕も、住んでいるアパートの中に畳を二枚敷いて茶室をつくったりして、ニューヨークで、生まれて初めて日本の伝統に真面目向き合ってみたくて。

建築家が偉そうにふるまえる時代は終わった

—— 今や隈さんは「和の大家」と呼ばれます。ただ、隈さんの建築は周囲から浮かび上がった感じがしません。例えば東京・池袋の豊島区新庁舎が入る複合施設（としまエコミュニゼータウ

ン）は、そびえ立つ六本木ヒルズとは異なり、周囲になじんでいます。隈 自然素材や陰の使い方のせいで、そう感じられるのでしょうか。六本木ヒルズはピカピカし

た建築で、陰がありません。僕の建築は陰がいっぱいできるように設計してあるんです。これは日本建築の昔からのお家芸ですが、屋根の下に陰や木漏れ日ができるようにすると、周りに溶け込むような建築になります。

—— フランク・ロイド・ライト（注4）と隈さんの建築には通底しているものがある気がします。

隈 まさにそれは当たっていますね。ライトは日本建築をすごく勉強しました。軒が深く出た日本の建築に出会って、ライトも軒を出すスタイルを始めたんです。陰も大事にしていました。ライトは近代的な感性で日本というものの中に現代性を発見した建築家でしたが、それは今僕

（注3）原広司

一九三六年生まれ。建築家、東京大学名誉教授。代表作に梅田スカイビル、京都駅ビルなど。

（注4）フランク・ロイド・ライト

一八六七〜一九五九年。二〇世紀のアメリカを代表する建築家。自然との融和を目指す「有機的建築」を提唱した。岡倉天心著の『茶の本』に影響を受けたとされる。日本でも旧帝国ホテルなどを設計した。



くま・けんぞ ●1954年生まれ。64年東京オリンピック時に見た丹下健三の国立代々木競技場に衝撃を受け、幼少期より建築家を目指す。大学では、原広司、内田祥哉に師事し、大学院時代に、アフリカのサハラ砂漠を横断し、集落の調査を行い、集落の美と力に目覚める。コロンビア大学客員研究員を経て、90年、隈研吾建築都市設計事務所を設立。東京大学教授を経て、現在、東京大学特別教授・名誉教授。これまで30カ国を超える国々で建築を設計し、日本建築学会賞、フィンランドより国際木の建築賞、イタリアより国際石の建築賞など、国内外でさまざまな賞を受賞。主な著書に『点・線・面』（岩波書店）、『ひとの住処』（新潮新書）、『負ける建築』（岩波書店）、『自然な建築』『小さな建築』（岩波新書）、他多数。

がやろうとしていることと同じです。

—— 八六年に自らの設計事務所を始められました。これまでずっと順調だったわけではなく、九〇年代には仕事の依頼が全然なかったと伺いました。隈 本当に一〇年間、東京で一つも建築をつくることができなかったんです。バブルが弾けた後、デザインの面白いものをつくるようになっていきました。空気もなくなりました。ただ、そんな苦節一〇年の時期に僕は地域の建築に携わるようになりまし

た。その地域の職人さんたちの話を聞き続けて、新しい材料とかやり方を学ぶことができたんです。

東京の仕事では、建築家の僕が職人さんと直接話をしたくて、ゼネコンの現場所長が許してくれませんでした。「工程と予算のコントロールがきかなくなる」という理由で。ところが、仕事で現場に行ってみると、違う時間が流れていました。本当にいろんなことを学べたんです。—— スケッチや図面を描いて送るだけで、現場には足を運ばな

い建築家も少なくないと聞きま

す。隈さんの姿勢はそれとは対照的です。

隈 小学生の頃から自宅の増改築を手伝っていたんです。もともと小さい家だったから、僕や妹が成長して大きくなると手狭になってきた。そこで家族みんなで間取りを考えたり、部屋を増築したり、毎年少しずつ手を入れていました。最後の仕上げは父親の担当なのですが、僕はその手伝いで塗装とか床張りとか、天井までやったこともあるんです。材料を買ってきてスクリービスで留めて。そのうち工事や材料のことも興味を持つようになりましたね。

くったりする。そういう西欧の伝統が明治期の日本に入ってきたんです。それまで日本には建築家という職業すらなかったわけですが、偉そうにふるまうというこれまで西欧から学んできました。そのうえ、戦後の高度成長期には建設会社が建築家をもてはやしました。建築家から仕事をもらおうと思って。

—— 建築家というと、近寄り難いアーティストといったイメージもあります。隈研吾さんという建築家像にはそんな印象を持ちません。隈 もともと建築家というのは西欧では権威の象徴で、王様の脇でふんぞり返っていたんです。街の建築はつくらず、権力者に寄り添って宮殿を建てたり、国家や都市のイメージをつ

くつたりする。そういう西欧の伝統が明治期の日本に入ってきたんです。それまで日本には建築家という職業すらなかったわけですが、偉そうにふるまうというこれまで西欧から学んできました。そのうえ、戦後の高度成長期には建設会社が建築家をもてはやしました。建築家から仕事をもらおうと思って。

—— 建築家というと、近寄り難いアーティストといったイメージもあります。隈研吾さんという建築家像にはそんな印象を持ちません。隈 もともと建築家というのは西欧では権威の象徴で、王様の脇でふんぞり返っていたんです。街の建築はつくらず、権力者に寄り添って宮殿を建てたり、国家や都市のイメージをつ

くつたりする。そういう西欧の伝統が明治期の日本に入ってきたんです。それまで日本には建築家という職業すらなかったわけですが、偉そうにふるまうというこれまで西欧から学んできました。そのうえ、戦後の高度成長期には建設会社が建築家をもてはやしました。建築家から仕事をもらおうと思って。

九〇年代以降、建築が成長を牽引するようになった。二〇〇〇年代になると、社会の建築を見る目が厳しくなってきた。大きな高いビルは太陽の光を遮る悪者です。

くつたりする。そういう西欧の伝統が明治期の日本に入ってきたんです。それまで日本には建築家という職業すらなかったわけですが、偉そうにふるまうというこれまで西欧から学んできました。そのうえ、戦後の高度成長期には建設会社が建築家をもてはやしました。建築家から仕事をもらおうと思って。

僕らの世代はそういう時代から建築家として仕事を始めたんです。高度成長期の時のような偉そうな態度をしていたら笑われるだけです。僕は逆に、地

面に這いつくばる感じで行かない。くちやいけない。地域の人たちともそういうふうに接して、彼らからいっぱい学ぶべきだと思います。

国立競技場に用いた日本伝統の「細い木」

——国立競技場の設計をめぐっては、第一回のコンペで選ばれた案がキャンセルされ、第二回のコンペで隈さんの案が選ばれました。

隈 第一回のコンペは応募要項がものすごく厳しくて、僕はお呼びじゃないんだなと思いました。超大御所の建築家か、巨大競技場の設計実績のある超大手設計事務所しか応募できないようなコンペだったんです。ただ、選ばれた案を見た時、これは神宮外苑の森の中には合わないと感じました。森が主役であるべきなのに建築のほうの主役然としていたからです。

——隈さんの国立競技場は軒庇ひさしに日本全国の木材が使用され、ほかにも随所に木があしらわれています。第二回のコンペ

の審査では環境的な設計も重視されたそうですが、隈さんは以前から環境に優しい木を重要な素材として使ってきました。

隈 僕が最初に木を使ったのは高知県橋原町の「雲の上のホテル」で、一九九二年頃にできていたんですね。僕の家が増改築できたのも木造だったからですが、橋原で木の柔軟性に改めて気づき、こんなに面白い素材なんだと実感しました。木を使うだけで空間を変えることもできます。ペットが一匹いるだけで場も和むように、木は生き物としての不思議な力を持っています。

——国立競技場の設計では、一〇五角という寸法の安価な木を活用されたそうですが、どのようなお考えからでしょうか。

隈 日本の木造は世界で一番洗



高知県橋原町にある、隈氏設計の「雲の上の図書館」

(写真提供：川澄・小林研二写真事務所)

練され、しかも経済的で、細い木をうまく組み合わせる強い建築をつくってきたわけですね。一〇五角の小径木は日本で一番使われている規格材で、住宅の柱でもなじみがあるはずですね。組み合わせると強くて繊細なフォルムができるし、しかも

一〇五角のような小径木は、間

伐材を積極的に利用する日本の木材生産・循環システムの中心にあります。そんな日本特有のものを活用して競技場をつくりたかったのです。

——新型コロナウイルス感染症の影響で日本人の生き方や暮らし方が大きく変わりつつありますが、建築については今後、ど

のような方向に向かっていくのでしょうか。
隈 「超高層モデル」はコロナ禍をきっかけに終わると思いません。大都市の超高層ビルに働く人々を集め、生産効率を上げるモデルですが、これは工業化社会にふさわしい効率的建築様式

だと言うこともできます。二〇世紀初頭にアメリカで工業化が進み、工場に労働者を詰め込んで働かせる仕組みが生まれましました。それが現代の超高層ビルにもつながり、効率的建築は世界中でコピーされ続けてきたのです。でも、二〇世紀後半には

ナンセンスなモデルになりました。情報技術の進展で、どこにいても仕事ができるようになり、大都市のビルに集まる必要はなくなりました。なのに、依然として超高層モデルをつくり続けていた。そこに新型コロナウイルスがやってきた。人間の怠慢が

で小さな事業まで手がける建築家も増えていきます。建築実業家なんて名乗る人がいたりするし、そういうたくましさのある若手がこの先の建築を担うことになればと思いますね。
—— 本日は、ありがとうございます。
（聞き手／情報サービス局長（取材当時 渡邊昌一）



隈氏が設計に携わった「国立競技場」

（写真提供：独立行政法人日本スポーツ振興センター）



国立競技場の最上部を一周するようにつくられた「風の大庇」 （写真提供：独立行政法人日本スポーツ振興センター）

感染拡大の一つの原因だと思っています。

だから、どうやって超高層ビルを出るかが、これからの課題です。大都市から逃げたいという声も聞かれているようです。離れても仕事ができる情報技術を僕らはもう手に入れているわけですから、街づくりや建築のほうが遅れているということです。

若い世代の建築家の中に面白いことをやっている人がたくさんでてきました。僕の上の世代の建築家とは大きなギャップを感じていましたが、工業化社会の後の若い世代との間にはあまり感じません。都市からの出方とか自然への出方とか、若い建築家はそれぞれに楽しんで取り組んでいる感じがします。自分で小さな事業まで手がける建築家も増えていきます。建築実業家なんて名乗る人がいたりするし、そういうたくましさのある若手がこの先の建築を担うことになればと思いますね。

—— 本日は、ありがとうございます。